

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1770101432		
法人名	有限会社わたなべ		
事業所名	グループホームひまわり		
所在地	石川県金沢市三十苅町丁147,148		
自己評価作成日	令和5年11月7日	評価結果市町村受理日	令和5年12月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社寺井潔ソーシャルワーカー事務所
所在地	石川県金沢市有松2丁目4番32号
訪問調査日	令和5年11月17日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

年中、花と緑に囲まれた清潔感のある静かで心安らぐモダンな民家で、ご理解のある地域の方々、資質のある職員に守られ、利用者のプライバシーと尊厳を保っています。自立した生活を目指して、お互いに心から、「お逢いできて良かった」と生き活きた表情の利用者、家族、また職員より言い続けて頂いているホームであり、かつ、四季折々の新鮮な食材を多く取り入れ、カロリーを考えた食事を提供し、これからも「心ある日本一のグループホーム」を目指しています。ご家族アンケートでは家族全員の方々から我々の努力している点、色々な面をしっかりと理解して下さい、また、退去者ご家族とも交流が続き、心ある温かい言葉、お褒めと感謝の気持ちを頂き、今後もこの言葉を誇りに、思い、励みとし、心身共に福祉に力を入れたいと再度、職員全員が団結しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

コロナ以前は、盛んに地域との交流を行っていたが、現在は制限をせざるを得ない状況になっている。そんな中でも町会の掃除に参加したり、夏祭りには声かけをしてもらったり、人込みを避けて利用者と一緒に近くのお店へ買い物に出かけている。また、事業所の農園(ひまわり畑)で野菜作りをしたり、散歩やドライブに出かけたりと、外出する機会を多く作っている。家族や近所の人とれた野菜をたくさん持って来てくれて、自然な交流となっている。
食事作りは、決まったメニューは設けず、旬のものを楽しんでもらいたいという考えのもと、施設の畑で採れた野菜など季節の食材を積極的に取り入れている。利用者が高齢化していることもあり、一緒に作ることは難しいが、準備する過程での会話や香り、音など五感で楽しめる食事時間を意識している。イベントごと(誕生日、クリスマス、正月、雑祭り、節分、お花見など)を大切に、行事に合った食事を準備するなど、食から季節感を知ってもらう工夫も大切にしている。コロナが5類となったが、感染対策として、食事時は席のスペースをとった配置とし、安全面にも余念がない。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~59で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
60	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	67	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
61	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,42)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	68	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
62	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:42)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
63	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:40,41)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
64	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:53)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	71	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
65	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	72	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
66	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	私達は大切な命を「安心と尊厳のある生活を地域の皆様と共にお守り致します。」とうたい理念としている。この理念を守る為、必須項目①エチケット(礼儀作法)②モラル(道徳、心)③マナー(言動、態度)④ルール(規則、マニュアル)を念頭において運営、実践に繋げている。少しでも楽しく穏やかな日々を過ごせるように、職員一同試行錯誤し、資質を高めながら、地域の方々、ご家族の方々のご理解、絶大なご協力を得つつ、喜怒哀楽を共有している。	理念は玄関の下足箱の上に掲示してあり、日誌のところにも理念や目標が置かれており、職員は毎日確認している。管理者はミーティングや日々の申し送り等を通じて理念について職員に語りかけ、その実現のために努力している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	例年は積極的に地域のお店や理髪店、近所へ散歩へ出ている際、近所の方と立ち話をしたり、公園に遊びに来ている保育園の子供達と触れ合う機会、町会の行事に参加し交流が多い事業所であるが、コロナ禍であった近年は行事等は中止または、参加を見合わせ、三密を避けながらの生活の為、マスクをし、一定の距離を保ちながら散歩をしている。地域の方と、互いに離れた距離から、会釈したり、手をふり、一言二言挨拶を交わしている。コロナ禍が過ぎた現在でも、新たにインフルエンザ・コロナの同時流行禍に居るため十分に気を付けて過ごしている。皆が元気に他者と交流できるように出来る限り、畑や散歩の機会を減らさないようにしている。	コロナ以前は自己評価にあるように、盛んに地域との交流を行っていたが、現在は制限をせざるを得ない状況になっている。そんな中でも町会の掃除にでたり、夏祭りには声かけをしてもらったり、人込みを避けて利用者と一緒に買い物に出かけている。また、事業所の農園(ひまわり畑)で野菜作りをしたり、散歩やドライブに出かけたりと、外出する機会を多く作っている。家族や近所の人ととれた野菜をたくさん持って来てくれて、自然な交流となっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	会長・施設長共に町会発足当初からこの町に住んでいる。当初から現在に至るまで町会の役員を多くしてきている。双方の行事などお互いに楽しく助け合って協力し、地域住民から色々な場で認知症又はその身上相談を受けることも多く、当ホームとの信頼関係が強い。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナウイルスの5類への移行に伴い、運営推進会議を再開。ひまわりの報告協議内容として、年間運営活動計画、直近数ヶ月の活動について、火災通報避難訓練、BCPIについて、利用者の様子や生活状況等を報告し、さらに、参加頂いているご家族、町会、市役所、包括、有識者の方々からのご意見、ご感想、アドバイスや労いと激励の言葉を多く頂いている。今後も会議を活かした運営をしたいと思う。会議に参加された方々にとても参考になったという意見を頂いている。	今年度は初回のみ「書面による開催」としたが、5月の5類移行後は対面による開催となっている。町会代表、行政、地域包括、家族に参加してもらい2カ月ごとに開催している。9月のお便りには第97回の運営推進会議の写真が掲載されている。会議では最近の行事等運営に関することや利用者の状況、年間の運営計画等が報告されて、参加者から意見・感想をもらっている。また、代表者だけでなく各職員からのコメントも紹介している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	多様な面で、市担当者、市グループホーム協会、消防署、社会福祉協議会と連絡を取り合いながら、福祉に関する情報を早め早めに色々な分野から頂き、必要に応じて素早くご報告や相談を致している。特にこの3年間はコロナウイルス感染症対策、ワクチン接種に対して連携が事欠かせず、また、各団体からの研修や講義はオンラインで行うなど現状に応じた形をとっている。	コロナになってからは、市役所とは電話やメールでのやり取りが主となっているが、市主催の研修にはオンラインで参加して連携を図っている。今年、石川県主催の感染症予防の研修会を事業所で開催したほか、警察からも不審者への対応という防犯の研修にも来てもらっている。また、消防の方からも消火訓練や避難訓練に職員を派遣してもらい、訓練後には講評してもらっている。金沢市介護サービス事業者連絡会のグループホーム部会にも参加している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	左記のことは当然という心構えで取り組んでいる。個々の性格、1日の動きを職員は共有し、安心でき、心から楽しく、汗をかき、ケアをしている。玄関は施錠をしないため、利用者の安全性を考慮し、玄関モニターを設置。人材面に関しても特にこの仕事に適している方を選んで採用している。概ね3ヶ月に1回身体拘束廃止委員会を開催している。	身体拘束の事例はない。虐待防止・身体拘束等の排除マニュアルが整備されていて、ミーティング(毎月開催)時に研修を行い、その防止に努めている。身体拘束廃止委員会は今年度、5月8日と開催されていることを記録で確認した。建物の施錠は夜勤帯に防犯上の観点でしている。センサーを使用している人もいない。職員は身体拘束の弊害を理解し、工夫しながら身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	例年、会長、社長、施設長、全職員が高齢者虐待防止研修会(身体拘束廃止委員会含む)に出席している。常日頃から心からケアすることを念頭に置いて、左記の件などを話し合い、困ったときは、バトンタッチ方式で職員のストレスから左記の様な事が起きないように常に皆でストレスの原因を話し合って取り去る方法を笑いと共に取り組んでいる。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	例年は外部で開催されている成年後見制度等に参加している。以前からご家族からの必要に応じて説明の場を設けている。成年後見制度を活用した方の事例をミーティング等で話している。ホームを退居してどのようにして本人、家族の安心と納得ある支援継続を受けていたかを話し、今後も生かされるよう、日常会話として話している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時、家族や本人(自立度によりけり)左記の件は、原則として納得をし、入居している。入居後から終末期ケアについても詳細に話し合っている。介護度が上がるにつれ発症する症状について常に早め早めに話し合って相互納得して支援にあたっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナウイルス感染症対策のため、面会が出来ず、来訪されないご家族は気軽に施設長、ケアマネ、職員に近況を聞き、ご家族の思いをご連絡頂ける状況になっている。また、利用者や家族の不安を先々と心配りし要望を数多く取り入れるため、職員も五感で感じ、双方より良いコミュニケーションを維持している。職員が利用者の立場にまた、家族の立場に360度目配りして、ケアプランに取り入れれたり、テレビ電話でご家族との交流をしている。	相談・苦情対応マニュアルがあり、毎年見直しも行っている。相談・苦情の受付体制は重要事項説明書や玄関の掲示などで、利用者・家族へ周知が行われている。家族とは、利用者の面会時によく話しあったり、利用者の状況を伝えたり、管理者が個別に架電したり、毎月お便りを郵送するなどしてコミュニケーションを取るよう心掛けている。そのためか、今のところ特に苦情は寄せられていない。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	質の高い職員を育成しており、また、入居者の方がいて下さり、運営出来ていると心得ているので、カンファレンス、ミーティング時、また、時間を問わず気が付いた時に色々なアイデアを聞き、必ず、職員の意見は必ず取り入れる。意見・苦情は宝として取り入れている。職員からの提案を積極的に取り入れながら、特に職員の質の向上に力を入れている。	代表者はケアマネジャーとして、管理者はグループホームひまわりの施設長として勤務しており、ミーティングや毎日の申し送り、業務を通じて職員と話しあっている。職員からの意見や提案には耳を傾けて、必要なものは運営に反映して、より良いケアに繋げている。運営に関する意識の高さは、介護職員の保有資格(介護福祉士7名、喀痰吸引・経管栄養特定行為業務従事者4名)にも表れていると考える。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の家庭生活を確認し、行動状況を念頭に入れ、個々の持つ能力を十分に発揮出来るようまた、職員の組合せ次第でより良い仕事出来るので、勤務表はそれらの点に充分気を付けて作成されている。適材適所の担当、仕事の仕方をして頂き、職員の得意分野を広げていき、左記の条件を満足出来るよう職員の声を聞き、就業状況を整備している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	介護技術・知識、感染症、防災、高齢者虐待防止、身体拘束廃止他、外部研修・講演には常勤、パートを問わず積極的に参加し、統一性のあるケア、情報を保っている。管理者研修、実務研修(基礎・専門)等へは、各段階に合わせて参加している。また、研修等で習得したものを当ホームに於いて最大限生かせるよう全員が努めている。利用者からみて家庭的な雰囲気を保つために年代別の職員を雇用。70代、60代、50代、40代、30代、お互いに人間としての年代別の味を生かしそれをケアに生かしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	全国グループホーム協会石川県支部の定期的に行われる理事会に出席し、早めの情報収集に努め質の良いケアを目指している。また、研修等を通し他施設との交流を大切にしている。また福祉に関係する病院での研修に積極的に参加させて頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	「自分が本人または家族の立場であったら」ということを念頭に置いて、利用者の心理状況を五感で感じ、穏やかに傾聴をしっかりとし、共感、寛容の態度を心から示して信頼関係を築いている。利用者同士お互い助け合うという人間関係で大変平和で笑顔の絶えない穏やかな日々であり、職員又利用者、家族に感謝している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	上記にふまえ、左記の項目は家族の納得されるまで、傾聴し、命ある利用者を預かるので、現在も以前より何でも言ってお知らせの関係があり、苦情は当ホームの宝物と考えて、心から正していく姿勢であることを話し行動で示している。ひまわりの利用者家族同士の団結が非常に良好で強い絆となっている。運営推進会議では家族の温かい言葉を多く頂いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用者の生活状況を直接現場で見させて頂き、相談時に一番先に何を求めておられるのか、家族の状況を把握して必要とする支援の順を見極め、双方納得のいく支援を利用して頂く(入れ歯を入れたい、パーマをかけたい)。本人また家族の要望を実行し、ひまわりにて新たな生活を気持ちよく開始できるよう努め、現在も利用者また家族より、力の沸く声を頂いている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	当ホームは利用者と職員が共に時間を過ごし、お互いに助け合う、大家族的なホームである。また、利用者の方々には多くの知識と持っておられるので、職員一同教えて頂くことが多い。礼儀・作法・常識・料理・畑仕事・お裁縫・金沢の60～70年前からの様子・利用者の方々10～30,40代に流行っていた曲等々。脳トレで行っていることわざや熟語などは職員が、利用者に教わる事が多い。利用者、職員一同運命共同体と考え、助け合い、「動けることが一番」と利用者の方々が話している。日々、感情豊かに過ごしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族との交流・来所・電話などでの会話の際、本人の状況報告のみならず、以前の本人の姿やこういふときはどうされたいか、また、どのようにしたら本人にとってよいかお互いに考え解決に向うようになっている。家族の元へは毎月お便りと本人の活動の様子を写真をお送りし、大変好評を頂いている。また、希望の方にはテレビ電話で面会し大変喜ばれている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍後も、インフルエンザやコロナウイルスの同時流行が続くため、馴染みの場所への外出や人との面会は制限があるが、電話や、メール、写真を送り合うなど互いの関係を良好に保てるよう支援している。また、馴染みの場所へは、行ける時期が来たら、是非行こうと本人の希望に沿いながら、日々の会話に楽しみとして話されている。感染対策をした上で、ご家族の了承を得たうえで自宅近くをドライブして景色を楽しんでもらう等一部実現している。	現在の面会の状況は、電話で予約してもらい、短時間で感染対策をとってホールで面会をしてもらっている。友人との面会も家族の了解があれば可能である。外出も家族と一緒にであれば家へ出かけたり、冠婚葬祭に行ったり、利用者の状況に合わせて行っている。事業所では感染対策をとりながら、できるだけ外出制限をしない方向で考えている。8月には野田山へ墓参りのドライブに出かけて、車窓から合掌してきている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士仲が良く、マスクをしてそれぞれの部屋を訪れたり、利用者同士お互いに声を掛け合い、孤立しないように心を配っている。また、身体や言語不自由な方には職員が寄り添い、本人の意思を汲み取るよう支援している。職員も自発的に部屋に行き、喜怒哀楽を共にし、傾聴する姿勢を忘れず会話をしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用終了後も近所においでた際に、立ち寄られたり、電話や手紙などを頂いている。退去後、本人の今後について相談を受けたり、また、本人・家族の希望により当ホームを通じて他の施設、病院等に行かれても最後まで見守る関係を保っている。「母の次は自分達が入居(を予約)するわ」との言葉をよく頂く。又、退去後にも行事のお声を掛け、参加され共に楽しんで下さっている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居前の様子を知る中で、知り得た情報を職員全員で共有し、個々の希望を早めにキャッチして、部屋の模様替え、リハビリ等の必要な方は、本人の得意だった分野を取り入れた方法(縫い物、絵画、歌、調理、畑仕事、家事)をケアプランに取り入れ、一人一人のペースに寄り添った生活支援に努めている。以前のような外出希望に沿うことは感染対策の為、制限があるが、神社参りや墓参り、通院等出来る限り意向を反映している。またホーム内での、さまざまな楽しみが出来るよう支援し、少しでも多く安楽に過ごせるよう努めている。	家族からの入居前の利用者の情報や、入居後の生活の中で気づいたこと等を積み重ねて、本人本位の検討ができるように努めている。職員は毎日一緒に生活しているので、なんとなく利用者の思っていることを感じていることを理解はしているのだが、新しい発見や気づきがあった時には申送りやミーティングを通じて情報共有して、その人に沿ったケアができるように考えている。利用者の表情、眼の動き、しぐさ等に注意してケアし、とりわけいつもと違う動き等があった時にはその原因を探り、原因を取り除くように努めている。例えば、ソワソワしている人がいて排便が原因と考えられるときには、食事や水分の面からのアプローチ等を試みている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	これまでの生活歴や生活環境、性格、一番輝いていた時期、嬉しい思い出などを家族等から情報を得ている。また、他施設の利用者から当ホーム利用の際、情報を提供して頂いている。お互いに協力しあい、楽しい生活が出来るように実行している。プライバシーに必要以上立ち入らないよう配慮しながら支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	傾聴を個別に多くの時間をとり、好きな音楽、色々な所見を聞き出し、その時点でも活き活きた口調、目の輝きなど、しっかり憶えて実行に移すよう、またその人の体調に合わせた流れにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	23,24,25を実行、念頭に置いて、家族・担当医・職員一同で本人が一番望んでいることを反映出来るよう、職員全員、ご家族から意見や要望をカンファレンス・運営推進会議の中で本人の現状に合わせて話し合い、参加出来ない家族には事前に希望を聞き計画を作成している。作成後、再度家族に確認を得ている。本人の意志の在る方は、希望を入れている。縫い物(刺し子、小物づくり)、料理、畑、謡など、希望されているものは全て、時間が少しずれても支援している。無理をせず日常生活の中に全てリハビリとして取り組むよう心掛けている。	入居時は家族からの情報を基にアセスメントを行っているが、入居後には全員が参加してアセスメントを行いケアマネジャーが計画(生活支援計画)にまとめ上げている。サービス担当者会議には家族の意見・要望も取り入れて職員全員で周知・確認している。モニタリングは利用者の状態に合わせて、必要な人には1週間の間隔で行うこともあるが、大体は3か月毎に行い、大きな変化がなくても半年で計画を更新している。個人記録はバイタル、食事、飲水、排泄等と、前夜から朝の様子、昼間の様子についてひとり1週間分くらいの表に記載している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	左記のことは当然として実行しながら、その人に応じたケアの状況を分かりやすく個別日誌に記入し、また、内容によって、業務日誌にて回覧ほか、申し送り、ミーティングで情報の共有に努めている。そのため支援方法は職員間でよく話し合い、現状に即した対応を行っており、そのことによる介護計画の見直しは常に行われている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	個々人の尊厳を保ち、別な外出支援(選挙、墓参り他)、季節毎の催し毎の支援(お正月・節句・お盆・クリスマス等々)普通に家族で行うような支援を行っている。また、医療との連携で通院、入退院、医者と家族と相談の上、早めに退院し帰所して頂き、ホームにてゆったりと過ごせるよう取り組んでいる。家族の要望や本人の状態に添った食事内容、旅行、畑、メディア、小学生来訪時等柔軟に対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在も感染対策の為は出入りを制限しているため参加できない事がほとんどであるが、例年は民生委員、地域サロン担当、地域の方々には行事毎また、近くを通られた時などに立ち寄っていただき、様子を把握して頂いたり、アイデアや協力を頂いている。地域サロンに参加したり、公園や周辺への散歩を日課とし、互いに交流する機会を度々持っている。警察、消防、日頃お世話になっている所などに現状報告兼挨拶に伺っている他、運営推進会議にもご出席頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医より利用者の今後の体調の変化等、新しい情報も頂き、利用者及び家族の意向に合わせた受診支援をしている。又、専門医が必要な場合、家族と相談し、一番良い方法をとっている。常に医師とのコミュニケーションを円滑に行い、家族と共に、早め早めに利用者のことを生活歴等を念頭に置いて、常に今後の医療受診について話している。また、職員も医学の知識を増やすよう情報を共有し勉強をしている。	協力医療機関が主治医となっていて、月に一度往診してくれ利用者の健康管理を行っている。往診時には医師から直接指示を受けたり、利用者の最近の状況を伝えて適切な医療に繋げている。主治医は、急病時の往診や、24時間オンコール体制をとってくれるので職員や利用者の安心感は大きい。内科以外を受診する時には主治医が紹介状を書いてくれて、職員が通院介助している。歯科の場合には、近くの歯科医院へ職員が付き添って受診・通院している。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	当ホームは主治医との関係が非常に良く、定期的に診てもらう他、少しの変化でも家族、主治医に早め早めに連絡し対処しているので、主治医の見極めが早く、医院は車で5分の所にある。24時間対応を頂いており、主治医、看護師より随時指導を頂いて(入居前からの主治医とも継続しながら上記の様に行動している)、家族にその都度連絡を詳細にしている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は必ず家族、医師、社長、施設長、ケアマネが対応、医療方法を聞き、当ホームの方針により早期退院について話し合い、常に早めに退院が出来る。病院で退院後のリハビリ、食事、入浴方法等を研修させて頂いている。入院中は家族と連絡を取りながら(連絡ノートを常備)、毎週4~6回以上は出向き、馴染みの品を持っていく他、食事介助、付添を行い、状態を聞きながらリラックスして頂けるように工夫している。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	当ホームの方針として、理解出来る方には本人の希望を主として、家族も希望も合わせて取り入れ入居前の見学時から終末期について説明し、入居後、定期的に病状の変化などを説明する。その都度、ご家族・認知症専門医・当ホームで意見を出し合って終末期ケアについての方針を共有する。ターミナルケアで今まで入居者の2/3の方を見送っており、この経験を生かし、24時間の医療連携を整えている。現在 たんの吸引・経管栄養の資格を4名が取得している。今後も全員資格を取得し安心したターミナル支援を提供する。	看護師の配置により「医療連携体制加算」を算定している。この他喀痰吸引・経管栄養特定行為業務従事者も4名おり、基本的に事業所で重度化に対応する考えである。骨折などで入院した場合でも、退院後は大体ホームに戻ってきて生活している。看取りの事例もあり、現在も看取り期の利用者がいて、訪問日にはその方の急変があり、医師や家族が来訪して大変慌ただしい様子であった。看取り期には、主治医が家族に状況を説明し同意をもらい、看取りのケアプランに基づき実施している。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	上記に続いて左記の件についての研修がある時、全て参加し、その上で定期的に事例を上げて話し合い、また、早めに救急蘇生法、少人数でも起こりうる場所で万一を予測して予防または発生時の訓練をしている。また、町会のひまわり支援隊8名を組織して頂いており急変や事故発生時についても話し合い、いろいろなアイデアを頂くなど大変心強い状況で現在に至る。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○緊急時等の対応 けが、転倒、窒息、意識不明、行方不明等の緊急事態に対応する体制が整備されている	上記と同じ整備されている。研修、検討会等を日常生活の中で取り入れて常に(マニュアルを定期的に見直しと共に参考にしながら)対応できる体制にしている。適宜、看護、見守りなど出来る部屋も用意している。現在、利用者の中では、一見元気そうだけど、大きな病気を抱えている方多く、全体が重度化しており、また、ターミナル時の方もおられ、毎日が緊急日であるので、穏やかな流れになるように落ち着いた適切な支援をしている。	緊急時対応のマニュアル(毎年見直し)や連絡網(職員、入居者・家族等)随時更新)を作成し、マニュアルはすぐに手の届くところ、連絡網は日々の記録用紙と同時に配置し、いつでも目の届く場所で管理している。ヒヤリハット報告書の取り組みも盛んであり、毎月のミーティングや日々の申し送り時に随時検討を行い、リスク管理を行っている。また、1階裏口から近く、トイレからも近い部屋として、看護・見守りがしやすい部屋も準備されており、いざという時の体制を整えている。	
36	(14)	○バックアップ機関の充実 協力医療機関や介護老人福祉施設等のバックアップ機関との間で、支援体制が確保されている	バックアップ機関の医師、介護老人福祉施設等の方との連携もしっかり保たれ、運営推進会議等に出席して頂き、色々とアドバイスを頂き、また、専門医の診断を定期的に受けるなど、充分支援体制がとれている。利用者も家族も不安のない様に支援体制をとっている。医療連携を24時間行い、かつ、現在、看護師と共に、たんの吸引・経管栄養の資格を4名が取得し、全員の取得を目指している。	管理者が協力医療機関(往診医、歯科医、精神科医等)と密な関係性を構築しており、日頃から情報共有を適宜行っている。往診医とは、24時間体制で医療連携体制をとっており、緊急時やターミナル時など臨機応変な対応が行われている。通院に関しては、基本、職員が同行し、医師から直接診察内容等を共有することができ、スムーズな連携に繋がっている。また、看護師と共に、正社員全員が痰の吸引・経管栄養の資格を取得している。	
37	(15)	○夜間及び深夜における勤務体制 夜間及び深夜における勤務体制が、緊急時に対応したものとなっている	夜勤職員の他に、同一敷地内に会長、施設長が居住。また、車で3～10分まで出勤できる職員が多く、協力姿勢が強く、町会、地域の方々にも協力隊を組織して下さり、日中夜問わず、年数が経つごとに大変心強い状況であり、夜勤者も安心感があり心強いと話している。	夜勤者は1名であるが、同一敷地内に管理者が居住しているため、何かあればすぐに駆けつけられる環境となっている(第一連絡先が管理者となっている)。全職員が施設から近い距離に住んでいるため、必要に応じて駆けつけることも可能である。また、長年の信頼関係から生まれた、地域の協力隊の存在も心のお守りとして大きな安心感となっている。	
38	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	毎年の事であるが、色々と想定して避難訓練を定期的に行っている。日頃から町会の協力を頼み、信頼関係を保っている。町会でひまわりへの緊急時支援隊を組織して頂いており感謝している。今年はコロナ禍の為、内部研修を主としている。消防署職員による、人形を使った寝たきりの方の避難誘導、消火器を使った消火訓練を職員全員が実施。また、警察署職員による、安全管理して、実践さながらの不審者対処方法を受講ひまわりでの避難訓練は通報訓練・避難誘導・寝たきりの方の避難誘導(職員がベッドに横になり外へ運び出す訓練)等を行っている。	落雷想定などさまざまな状況を想定した訓練を開催しており、避難訓練(日中、夜間想定)、火災通報訓練など、少なくとも年に3回は訓練を実施している。訓練時は、基本的には利用者全員と職員が参加し、一体感を持った取り組みとなっている。消防署員を招き人形を使った避難誘導など、コロナが5類になったことで、少しずつ外部と連携した取り組みが再開されている。また、毎回訓練後には取り組みを振り返り、次回に向けての学びとして職員間で共有している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39	(17)	○災害対策 災害時の利用者の安全確保のための体制が整備されている	上記に続いて非常時の対応マニュアルあり。それにそって訓練を行っている。飲料水、非常食をリストに基づき用意している。また、定期的な点検を行い、その時に気付いたものは追加して備えている。火災通報装置、スプリンクラーを設置している。台風の接近時など再度、電気や水が止ったときの事を想定し、水、食糧の備蓄を補充を意識している。東北大震災の時は、当ホームの安全確保のみならず、2名の職員が交代で被災地へ応援隊として参加した。介護の担い手として活躍し、その際支援物資として利用者家族の協力を頂き、多くの衣類を寄付した。	非常時の対応マニュアルの整備や連絡体制、利用者情報等、備蓄品(利用者と職員分)の点検、火災通報装置、スプリンクラーの設置など、非常事態の備えに余念がない。点検を行う中で、今期新たに、発電機(ガスボンベ使用)や飲料水の補充を行っている。BCPIについても、新型コロナウイルス感染症発生時における業務継続計画は策定されており、自然災害発生時の事業継続計画については、完成間近である。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
40	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	左記の支援は充分念頭に於いて明日は我が身と思い、礼儀作法は特に「内面から出ているのが一番」と周知常に人材育成の一環として、勉強会、ミーティング等にて徹底に努めている。日頃から、介助が必要な時でも人前であからさまにしたり、誘導の声掛けをして傷つけてしまわないように、利用者自身の気持ちを最優先に考え、さり気なく支援するよう心掛けている。(特に一人一人の生活歴に配慮を大切にしている)	利用者一人ひとりの気持ちを最優先にという考えのもと、職員の人材育成に力を入れており、職員の心の健康が質の良いケアにつながるという信念を掲げ、勉強会やミーティング時に、心理やカウンセリングの勉強をした管理者を中心に、心の教育に努めている。そうした教育が実り、現在は利用者一人ひとりの個性が出た生活空間になっているとの話が聞かれた。	
41		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	上記に同じく、ミーティング等にて一人一人の生活歴、希望、現状を把握理解している。日常の生活、歌、軽体操、散歩、大きな行事に至るまで、ほとんどが利用者さんの希望であり、実現している。左記の件は家族も本人も充分満足されている。		
42		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	当ホームは最初からグループホームでは当然と考えている(上記とおり)。		
43		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	職員は常に「自分が利用者の立場であつたら」ということを念頭において支援している。身だしなみ、おしゃれ(化粧、ヘアメイク)をする時間は1日の流れに入っており、皆が楽しみにしている時である。季節感をこの時間ははっきり理解され、大変話題の多い時間帯である。また、お互いに評価し合う場面が毎日である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	左記の通り実行している。ひまわりの利用者と共に作る畑からの野菜、家族、友人や近所からの多くの届け物を使った食材をを利用者から寮にの方法を色々と教わり大変楽しい。現在も実行しているが、ひまわりの畑で利用者の希望の作物を作り、収穫した物を家族や近所の方々にお裾分けしている。四季感のある食卓が当ホームの特徴である。利用者馴染みの味付けに特に気配りをしている。また、状況に応じて、2階ホールや居室で友達同士で色々工夫して楽しく食して頂いている。	決まったメニューは設けず、旬のものを楽しんでもらいたいという考えのもと、施設の畑で採れた野菜など季節の食材を積極的に取り入れている。利用者が高齢化していることもあり、一緒に作ることは難しいが、準備する過程での会話や香り、音など五感で楽しめる食事時間を意識している。イベントごと(誕生日、クリスマス、正月、雛祭り、節分、お花見など)を大切に、行事に合った食事を準備するなど、食から季節感を知ってもらおう工夫も大切にしている。コロナが5類となったが、感染対策として、食事は席のスペースをとった配置とし、安全面にも余念がない。	
45		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	本人の可動性に合わせた栄養のカロリーを考慮しつつ、家族、病院等により摂取状況を確認の上、栄養バランスがとれた調理に心掛けている。体に合わせミキサー食、軟粥、刻み食、また小食の為、三食の食事では栄養が十分に摂れない方は間食を工夫するなど、一人一人に合った支援を行っている。ホールには日中自由にお茶が飲めるようにポットと湯飲みが置かれている。全ての利用者が水分を充分確保されている。利用者同士が声を掛け合い、スタッフは確認し、また、全介助の方には、水分補給時に、何かをどれだけ摂取したか、職員間で情報を共有し、水分不足にならないように徹底している。		
46		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、自分達で、口腔ケアを行っている。一人一人に応じた声掛け、見守り、チェック、介助している。虫歯や義歯の調整は早めに対応している。口腔ケアについて他、歯科医師や歯科衛生士より指導受けているほか、いつも口腔ケアが良く出来ていると評価を頂いている。利用者が清潔で快適な日々を送って頂けるよう支援している。		
47	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人一人のサインを見逃さず、職員がそのサインを共有しており、自尊心に配慮し、さりげなく誘導するよう支援している。体力や自立度に合わせ部屋の位置(トイレに近い等)やトイレの扉の構造も考慮している。また、排尿に関し慢性化した病気を持つ方には、医師と連携しながら、安心した生活を送れるよう日々支援している。	日頃の密な関わりから、一人ひとりのサインを把握しており、さりげない声かけでのトイレ誘導を行っている。夜間については、安眠できるよう、ご本人と話をしながら、パッド使用を行い、良質な睡眠につなげている。尿路感染になりやすい方などは、医師と連携を図り、清潔保持や内服等の指示を仰ぐなど、安定した健康状態の維持にも努めている。	
48		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	主治医と相談し、便秘の原因を調べ、異常がない場合は、薬に頼らず、食物繊維の多い食事内容にし、また、毎日適度な運動をする他、生活リズムを整えている。食べられない方は医師と相談。お腹を「の字」にさすることなども予防方法に取り入れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴の希望を聞くと利用者同士で自然と決め、その後、利用者とスタッフが話し合っ決めていく。利用者全員また、家族の方にも入りたい時間帯を聞くと、やはり安全な時間(昼間)を希望される方が多く、夜間は本人が万が一を考えて避けることを希望している。現在のところ職員をねぎらって下さる利用者が多く幸せな流れが続いている。入浴時は出来る事は自分でして頂く事に力を入れている。	週2回の入浴を行い、1日2～3名入浴している。利用者全体の高齢化が進んでいることから、入浴での体力消耗が大きく、利用者からも入浴を回避したいなどの声が聞かれることがあるため、本人と話し合いながら、湯船に浸かることもあれば、シャワーにしたりするなど、その都度負担の少ない方法での入浴を行っている。また、看取り期の方には清拭対応を行い、負担なく清潔保持に努めている。	
50		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中、雨が降ってなければ、必ず、散歩、外出、外気良しをし、どんな時でも残存機能を活かした日常生活を送っている。個別での軽作業、レクリエーション活動、本人がしたい事を行っている。施設内は日中、有線の曲を流して、季節に応じた音楽やリラックス出来る音楽、また、利用者の家族から頂いた懐メロCDを流している。夜、安眠を取りづらい方は医師と相談している。フットケア、温かい飲物を飲んで頂くなど工夫をしている。		
51		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者全員の薬剤管理表があり、職員は、利用者全員の薬を把握している。家族、担当医と相談して当ホームは薬を少なくしていくケア方法をとっている。また、薬の副作用をつねに念頭に置いておくよう職員に指導している。		
52		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	認知症を念頭に置いて、利用者の顔、声、空気を読んでもらえれば直ちに分かる。これも、家族、職員利用者皆の心からの絆で、楽しく一丸となって生活を楽しまれていて、職員一同感謝している。		
53	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	感染対策と、現在の入居者の年齢が超高齢(95歳以上が多い)の為、現在は外出に制限があるが、例年は十分に安全を心掛け支援を地域の方々、家族の方々の協力を得て利用者の希望にそってどんどん実行している。散歩、畑、外食、ドライブ、映画鑑賞、恒例となっている地域の方々・家族との日帰りバス、コンサート(風と緑の楽都金沢音楽祭)、美術鑑賞(県立美術館)、お宮参り、墓参り他。元気であればどこでも行けるよう支援している。散歩では町会の方が、自然と寄り添って下さり、世間話をして過ごし和やかな時間を共にしている。今後も一層より良い環境を提供したいと考えている。	90代後半に差し掛かる方が多く、活発な活動を好まないため、感染対策として個別で体に負担の少ないドライブでの気分転換が多く、お墓参りやバラ園散策、お花見、紅葉狩りなど四季の移ろいを楽しんでいただいている。また、施設周辺にて畑で野菜栽培を行っており、利用者と共に育て、収穫を楽しんでいる。施設内においても庭をテラスとして整え、外の風にあたりながら、花々に囲まれ癒しの時間を過ごせるよう配慮されている。	
54		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	大金(数万円)は当ホーム事務所で預り、外出時の小銭は各自の能力に応じた適切な支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自由に出来ている。		
56	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	毎年の事で少しずつ花と緑を絶やさない様に心掛け、全ての物に本物でホッと一息出来るように工夫した。中庭では、道路から適度に目隠しとなる木を配置。トイレは利用者が安らいで使えるよう自宅と同じような広さを考慮し改築した。全ての所を五感に優しく感じられるように造ったので、現在のところ好評である。床は温水暖房をしている。トイレも安心感のあるカーテン等を工夫した。外庭を洋風のテラスにして、散歩の帰りにそのテーブルと椅子を利用してお茶を飲み一服している利用者から講評を得ている。	住宅を改修した作りで、かつ、周囲は緑に包まれ、近隣の外観に溶け込み、街の一部として親しみが感じられる。内部は温もりのある色合いで統一され、黒電話が設置されているなど、どこか懐かしくゆったりとした雰囲気が感じられる環境となっている。共有空間に飾る花は利用者に生けてもらう、掃除は雑巾拭きなどできる方はできる方法で取り組んでいただくなど、みんなで生活の場を気持ちの良い空間に作り上げている。また、ちょっとした段差など、適度に体を動かす機会を設けることで、無意識的にリハビリ効果につながり、身体機能の維持に繋がっている。	
57		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	中庭、居室などをその時の状況に応じて上手く使用し、2階ホールで仲良く常に話し合ったり、利用者同士で決めている(昼寝時間など)時の流れを楽しまれている。利用者一人一人に応じた違う造りとなっている居室は、カーテン、障子、家具など利用者好みを反映した。各部屋には応接用の机・椅子、生花や観葉植物があり、利用者だけでなく、訪問客が各部屋でゆったりとくつろげるよう配慮している。		
58	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	認知症の動きを考慮して、居室内全体が戸惑いのない整理整頓を行っている。また、好みの花、本、写真、壁飾り、時計、孫からのプレゼント、落ち着ける状態の品を多く取り入れるよう気を付け、シンプル好み、物を多く置きたい方などを見極めて過ごしやすい清潔かつ安全な環境を保つよう心掛けている。現在まで家族、利用者共に、最期まで居たいと言われる方が全員であり嬉しくこの状態を維持したいと思っている。	一般住宅を改修した作りで、各部屋がそれぞれ違う間取りや雰囲気となっている。木の温もりを大切にし、備え付けのベッドの他に、雰囲気に合わせた家具を事業所で用意しており、シンプル、かつ、気持ちの落ち着く環境となっている。入居前は制限されていた毎晩の晩酌を、入居により再開された方は、眠剤服用量が減るなど健康面での向上が見られている。一人ひとりの想いの実現に取り組み、その人らしさを追求することで、多くの利用者、その家族から、最期までここに居たいとの声をいただいていると管理者より話を聞いた。	
59		○身体機能を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	木のぬくもりを大切にして、利用者の自立度や体の状況に合わせた部屋選び、また、利用者のリハビリに応じて椅子や机、手摺りを変えたり、トイレのドアも変えるなど色々と工夫をしている。この方法も利用者の心を読みとり、利用者、職員の話し合いの中で決め、支援している。		